

ジャック・ランシエールの美学 —「美学的体制」における芸術

鈴木亘（東京大学）

ジャック・ランシエール(1940-)は、近年の芸術シーンにおいて最も影響力のある哲学者の一人である。本発表は、近年矢継ぎ早に邦訳が刊行されてはいるものの、いまだその全貌が捉えられているとは言いがたい彼の美学思想を、いくつかの重要概念の論理的連関を明らかにすることで検討するものである。

ランシエールは18世紀の「美学」の成立以降、芸術を芸術として同定してきた枠組みを「芸術の美学的体制 *régime esthétique de l'art*」と称する。彼によれば、この体制において、それまで個々の芸術作品の地位を定めていた諸条件——主題の品位、真実らしさの度合い、ジャンル間のヒエラルキー等——が消失し、芸術はそれ固有のある感性的存在様態によってしか規定されえなくなった。ランシエールはそうした芸術に固有の様態を「ディセンサス *dissensus*」ないし「異質性 *hétérogénéité*」などの言葉で語る。彼にとって「芸術の美学的体制」における芸術は、それに直面した際に引き起こされる違和の感情や宙吊りの感覚によって芸術と同定される。そしてその感覚により、「感性的なものの分割 *partage du sensible*」の再編成がもたらされるのである。

このような芸術観は、一見すると芸術の内部に「矛盾 *Widerspruch*」をみるアドルノや、崇高な芸術のもたらす「破綻 *désastre*」に注目するリオタールの議論の継承にすぎないとも考えられる。だが注目すべきは、彼ら二人がそうした芸術の特性をもっぱらアヴァンギャルド芸術に見出し、商業的作品や新表現主義を批判する一方、ランシエールは芸術の「ディセンサス」や「異質性」を、ジャンルやイズムを越えたあらゆる芸術事象に見出している点である。モダニズム芸術が衰退し、いわゆるポストモダンが叫ばれるようになった後にも、芸術のもたらす「感性的なものの分割」の再編成は失効していない。

本発表ではランシエールのこうした記述を美学史的観点から整理した上で、かかる「ディセンサス」や「異質性」が具体的にいかなるものなのかを考察する。発表者が手掛かりとするのは、ランシエールの2008年の著作『解放された観客』で展開される、芸術の「効力 *efficacité*」の議論である。彼はこの著作において、「美学的体制」における芸術の「効力」が決定不可能であることを論じる。すなわちこの体制においては、芸術に込められた作者の意図やメッセージが観客に決まった感性的経験を引き起こす、というモデルが失墜しているのである。本発表では、こうしたあらゆる効力の未決定性によって生じるものが、ランシエールのいうところの「ディセンサス」であることを示す。更に、こうした「ディセンサス」の経験が、それによって初めて観客が主体的に芸術に関わることが可能となる点で、ランシエールの目指す観客の「解放 *émancipation*」にとって最重要の構成要素であることが明らかになるだろう。